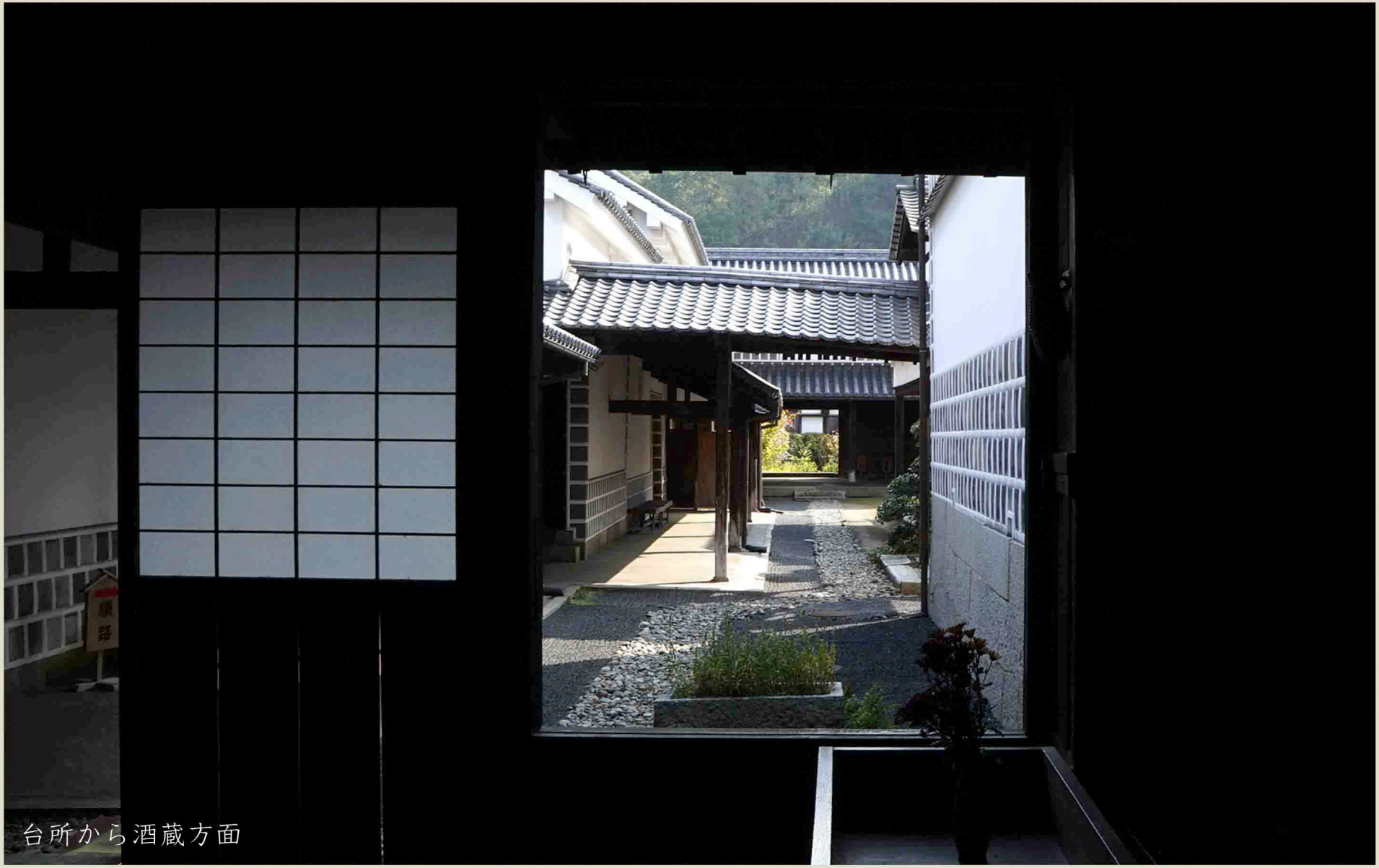
第２回　矢掛本陣酒蔵LP演奏音楽会

本陣は旧山陽道に面する部分が２０間、奥行きが５０間、面積は１０００坪にのぼる。
その東側部分に、酒蔵を中心とした醸造関係の施設が並んでいる。

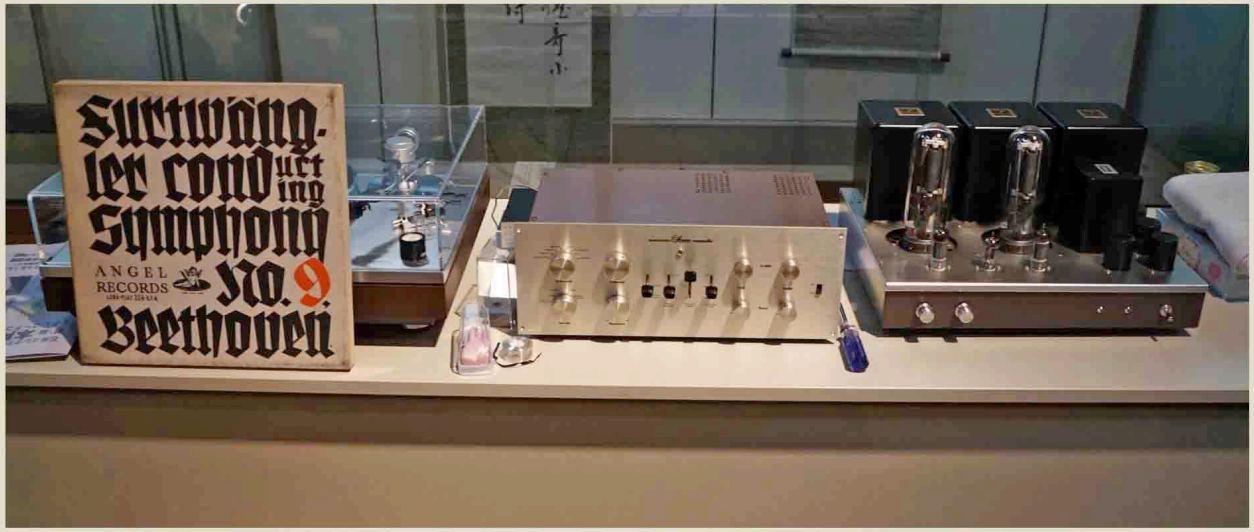
石井家では第４代源次郎の元禄2年（1689）頃から酒造業を始めた。幕末頃には酒造関係の建物の増改築をし、酒造業に本腰を入れ、「梅正宗」のブランドで、昭和４２年まで事業を続けていた（江戸期には「菊香」、「あさみどり」などの銘柄もあった）。酒蔵は桁行15間、梁間５間（７５坪）あり、最盛期には年間５８０石を醸造していた（江戸期の酒は１升＝１万円であったので醸造売上はおよそ5.8億円程度だった）。

その酒蔵で10月24日、第２回LP演奏会が開かれた。本陣の第13代当主・石井遵一郎氏は、戦後間もなく（1951年）売り出されたLPの熱心なコレクターで数千枚のLPを収集、死後、矢掛町に寄贈された。このLPを真空管を使った手づくりアンプで聴こうという篤志家がいて、今回は第２回めに当たる。
曲目はブラームスの「ハイドンの主題による変奏曲作品56a」（1873年）とベートーヴェンの「交響曲第９番」（1824年）。
遅れて会場に駆けつけた時には第九の第2楽章が始まっていた。途端にとてつもなく懐かしい音に包まれた様な気がした。やさしく、こちらの体に沁み込む様な音。それが数百年を経て、木目の浮き出た木造の酒蔵に溢れている。本陣、ベートーベン、フルトベングラー、LP、アンプ、里山のクラシックファン、こんなコラボがよくも実現したものだ。



台所から酒蔵方面

フルトベングラーの演奏会などは当然聴いたことはない。ところが、それが今目の前で行われている、次第にそんな気になった。第2楽章が終ると主催者の老人がプレーヤーのそばに立ってレコードを変える。まるで指揮者がタクトを下ろしたかの様な仕草だ。会場のそれほど多くない聴衆から「ふーっ」と感動の溜息が漏れる。暗い酒蔵の外には秋の光があふれている。



矢掛町に寄贈された石井氏のレコードコレクションは希望すれば聴ける環境が整っていた。しかし、CD化の中で聴く人もいなくなり、いつしかほこりをかぶって忘れられるようになった。これに光を当てようと教育委員会有志が動きだし、岡山県内のレコード収集家の強力を得て、LPを整理、公開の準備をした。そして、このたび、およそ６０年前の「石井コレクション」が本陣に里帰りすることになったのだ。
滝に向って流れを早める水のように、音が次第に流れを早め、合唱への期待がふくらむ。そして爆発する見事なテノール。吉田秀和が「濃厚な官能性と、高い精神性、その両方が一つに解け合った魅力」と評した、そのままの音が酒蔵を轟かすように響きわたる。
エンディングを前にぼくは終ったらスピーカーに向って「ブラボー」と叫びたい気になっていた。しかし、さすがにそれはためらわれ、拍手を始めた。何も反応しないで終れる音楽ではなかった。すると場内の聴衆もぱらぱらと拍手を始めた。「本物を聴いた」この拍手でその思いが確かなものになった。次はストラビンスキーの「春の祭典」を聴きたいとアンケートでお願いした。

酒蔵入口から台所方面

H.KANEKO